

---

# あの光をもう一度……

山城 ありす

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あの光をもう一度……

### 【Nコード】

N8777N

### 【作者名】

山城 ありす

### 【あらすじ】

ちよつと変わったお父さんから贈られてきたぼろぼろの時計。なんかいじってたらいつの間にか魔界に来ちゃってた！

しかもトリップした先でどこかのお姫様と勘違いされちゃって虎もどき（獣人です）に誘拐されちゃうし……あたし、どうなっちゃうの！？

はじまりは人違い！？なほのぼのファンタジーです。

## プロローグ

時はいまから何千年も前のこと。

このとき魔界と人間界は住人が行き来するほど友好的で、身近な存在だった。それはふたつでひとつの世界と言っても他言ではないほどに。

人間と魔界人も仲が良く、明るい共同生活を送っていた。

だが、そんな関係も長くは続かなかった。

それは、ふたつの世界の頂点に立つ王が亡くなったときのこと。

### 王座争い

王は、若くして亡くなったために後継ぎが居なかったのだ。

そこで2人の男が立ち上がった。

ひとりには魔界人、獣人のゴルジュ。

もうひとは人間のアナ。

この王座争いは、二世界の国民までもをとりまく大規模な戦争となった。

長い争いの末、人間界の王にはアナ。魔界の王にはゴルジュを立てることにして関係を断つことを約束した。

そして両国をつなぐ道は、全て閉鎖された……。そのはずだった。でも、魔界人全員が人間を嫌ったわけでも、人間全員が魔界人を嫌ったわけでもない。

だから両世界をつなぐ道は3つだけ、封印されてないのだ。

両世界の王は全て封印されたものと思い、その存在に気づくことはなかった。

### 数千年後の今

勿論その道は残っている。

「時計」として……

魔界に繋がるその「時計」の針を反時計回りに回すと魔界への道が現れるようだ。

たやすいことだが、王座争い以来この道を開いたものはいなかった。

それにあの時代の人々はもう生きていない。

誰も、あの道の開き方など知っているはずが無いのに……

三つの時計は、大切に保管されていたはずなのに……

一人の少女の手によって、その道は再び開かれようとしていた……

## ？繋がった世界

「珠夏。お父さんからなんか届いたわよ。」

リビングから聞こえる母親の声に、珠夏はなにか衝撃的なことでも聞いたかのように反応し、柔らかな長い髪を揺らしながら階段を駆け下りる。

「お母さん！お父さんからの、どこ？」

勢いよくドアをあけ、弾んだ声でたずねる。

「テーブルに置いてあるわ。」

珠夏がこんなにも目を輝かせているのは、父親が海外にいてめつたに会えないからだ。一番最近会ったのも2年位前になるだろう。珠夏が3才になったときから仕事もせず海外を旅している。「自分をさがす」とか訳の分からないことを言っていて……。でも、旅先で面白いものを見つけたら家に送ってくれる。珠夏はそんな自由気ままで家族思いの父が大好きだった。

珠夏がテーブルに目をやると、そこには拳ほどの大きさの小包があった。珠夏はそれを手に取ると急いで自分の部屋へもどる。

「あれ？」

丁寧にラッピングされた包みを開けて驚く。そこには小さな懐中時計があった。珠夏のキレイに整頓された部屋とも、あの可愛らしいラッピングとも不釣り合いな、ボロボロの時計……。

金色の縁はところどころ錆びて剥がれてしまっている。他のところも傷だらけだ。包みからその時計を取り出そうとして中に白い紙も一緒に入っていたことに気がつく。

父からの手紙だ。

「珠夏へ」

お父さんは今ヨーロッパにいます。

古風な感じの店でおもしろい時計を見つけたので贈ります。

お店の人は、昔から大切にされてきたもので特別な時計だと言っ

ていました。

その人は白いひげを生やしたよぼよぼのお爺さんだったけど、嘘をついている様には見えなかったので本当なのだと思います。でもサントさんではありませんでした。

良く分からないけれども、価値はあるみたいです。大切にしてください。

ボロボロだけどきつと珠夏のちからになってくれると思います。

お父さんよ

『り

短いものだったけれど、父の優しさが詰まった温かい手紙だった。珠夏は「お父さんらしいな」と思い、柔らかかにほほ笑む。

壊れちゃうんじゃないかと心配しつつもいろんな所をいじっているうちに時計から音が響き出す。「カチツ、カチツ」と機械らしい音と同時に秒針が動き始める。

「こんなにボロボロなのに、まだ使えたんだ……」

珠夏はいじってはみたものの、動くとは思っていなくて驚いた。

部屋の時計は午後4時30分。そして、お父さんに貰った時計は6時を指している。

「ちよつと早いな。合わせないと」

珠夏は裏についているネジを回した。

1時間半、時間を戻した。針がゆっくりと動く。

そう　　反時計回りに……

しかも、これはただの時計ではない。『魔界へ繋がっている』時計なのだ。

もちろん、この瞬間に魔界への道は開かれた。何も知らない一人の少女の手によって、再び2つの世界は「つながった」のだ。

「キャ

」

珠夏は叫び声を部屋中に響かせ、時計の中へと吸い込まれるようにして姿を消した。

## ？繋がった世界（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。

まだ始まったばかりなのにお気に入りに登録してくださった方もいて、とても嬉しいです。ありがとうございます。

アドバイスや感想なども頂ければ幸いです。

次回からはいよいよ”魔界”が舞台となります。よろしくお願いします。



？ ・人違いです（前書き）

今回、短めです。

？・人違いです

ここは魔界の中でも平和な国、アニユレール。

住人の殆どがエルフか獣人だ。エルフや獣人は争いを好まない種族がほとんどであるのも、この国が平和である理由のひとつである。いつもはにぎやかで活気のあるこの国の中心に位置する商店街も、今日は違ってピリピリとした雰囲気漂っている上、殆どの店が閉まっている状況だ。だが仕方ない。

今、この国では大きな事件が起こっているのだから。

『誘拐事件』『行方不明』……この国を不安で満ちさせているのはそんな不吉なワードだった。

この国は四季をつかさどる4つの城からなっているのだが、そのうちのひとつ”夏季の城”の姫様が一昨日から行方不明になっているのだ。

住人みんなが総出で搜索しているにもかかわらず、見つからない。

9

そんな静寂を打ち破ったのは甲高い悲鳴。

このアニユレールの国のど真ん中に澄み切った空から、ひとりの少女が降ってきた。

悲鳴を発した張本人……

珠夏だ。

空から落ちてくる珠夏の姿が一匹ひつの獣人のめに止まった。

いくら魔界といえど、空から人が降ってくるなど日常差万事なわけがない。獣人は驚きつつも、一目散に彼女の真下に走っていき、結構なスピードで落下する珠夏をがちりとした両手で受け止める。

その獣人は珠夏の顔を見るなり口をぽかんと開けて、目をこれでもかっけてくらい大きく見開いた。

思っていたよりもずいぶんと軽い衝撃にかたく瞑っていた目を見開く。

「と、とら!?!」

獣人を目にして珠夏は気が遠くなるほどびっくりした。目の前に二足歩行の虎もどきがいて、自分がその腕の中にいて……

「っ!リール様!!!」

当たり前のように話しているのだから。

獣人もなぜだか珠夏に負けなくらい驚く。そして急にポケットからなにやら黒い機会を取り出すとそれに向かって話し始める。

「こちら、スイル。中央商店街にてリール様を発見いたしました」  
その一言でその場に集まってきた野次馬たちの歓声上がる。

「やったぞー!」

「ほんと、よかつたわ」

「でも、なぜ空から……」

口々に言うが、みんなの顔からはすっかり不安の色が消え、商店街は再び活気に包まれたのだった。

だが、珠夏を取り囲むようにして騒ぐ見たこともない魔界人たちがあまりの驚きと恐怖心に珠夏は意識を手放した。

薄れていく意識の中で「リール様っ!」なんて声が聞こえた気がした。

？・だから、人違いなんです！

目を覚ますと、そこはととてもとても綺麗なお城でした。

珠夏が重々しく瞼を持ち上げると同時に大歓声上がる。

「リール様よ！」

「やっとお目覚めになったわ！」

「よかった……」

「これでもう安心だな」

なんて声が城じゅうに響いた。

珠夏はゆっくりと体を起こすと一番近くにいたスーツ姿のおじさん……じゃなくて獣人に声を掛けた。

これはきつと夢だよ。

だから、動物もどき（獣人）とか耳の尖がった人（エルフ）とかが居るんだよね。

「りいる？つて誰ですか？」

猫耳をぴくぴくさせながらおじさんは釣り上った目を大きく見開く。

「リール様？なにをご冗談を……」

不安げに尻尾をしゅんとさせた”黒スーツの猫もどき”は思いつきり作り笑いを浮かべる。

「いや、私は山城珠夏です。どうも、初めまして」

夢だと自分に言い聞かせた珠夏はいたって冷静だ。ちゃっかり挨拶までしている。だが、黒猫もどき（長いので略した）はいきなりウロウロし始めたかと思うと叫び始めた！？

「リール様が記憶喪失になってしまいましたにゃー」

動揺しているのか語尾が「にゃ」になってしまった黒猫もどき。

そんな彼とは裏腹に珠夏はひとりベットのうえで笑っていた。

キツそうな顔のいい年したおじさんが『にゃ』って。『にゃ』だよ!？」

「いや、やはりあの豪快かつ下品な笑い方は間違いなくリール様じや」

しわくちやの顔のエルフが真面目そうに言う。

「なんなのよ!あたしのどこが豪快で下品なのよ!？」

珠夏がむっと眉にしわを寄せて叫ぶと今度はうさぎもどきのおばさんが口を開く。

「すぐにかんしゃくを起こすところもリール様そっくり。いいえ、きつと本人だわ」

珠夏はこんな言われようじゃ姿を消したくなるのも分かるなあ、なんて顔も知らないリール様とやらの同情していたのだった。

だからなんとなく黒猫もどきのマネをして叫んでみた。

『あたしはりいるって人じゃないにゃー!!!』

？・だから、人違いなんです！（後書き）

すみません……。

ちよっとこづいづのが書きたくなったので。

次からはちゃんとまじめに書きますのでどづかよろしくお願いします。

？・お姫さま……ですか。

「にゃほん。それでは一からご説明させていただきます」

黒猫もどきが手を口元にあてて軽く咳払いする。

珠夏にとつても、それはありがたいことだ。自分がこんなところに来てしまった理由、リールという人のこと……。

全てが珠夏にとっては疑問だらけだったのだから。

珠夏がうなずくのを合図に黒猫もどきが話し始める。

「あなたはリールという名前で、この国の姫さまです。数日前に行方不明となり、その間に何かがあったと考えられます。そこで姫さまは記憶を失い、自らを”ヤシロシカ”とかいう変な名前の人間だと思い込んでおります」

つつこみどころ満載の黒猫もどきの説明とやらに、珠夏はため息をつく。

「あの、あたしはヤシロシカなんて名前じゃないんだけど。間違えるにしてもネーミングセンス無さ過ぎでしょ」

珠夏の言葉にあからさまにしつぽをしゅんと落とす黒猫もどき。

でも、珠夏はそんなの気にも留めずに言葉を続ける。

「ていうか、あたしは人間だし」

「そんなお姿で言われても説得力がございません」

珠夏が首をかしげていると、執事らしいエルフが鏡を手に走りよってくる。

「その美しきお姿をどうかご確認くださいませ」

ものすごく可愛らしい声でエルフが差し出した鏡を珠夏はおそるおそる覗き込む。

「ふえっ!？」

思わずまぬけな声を出す珠夏。

そんな彼女の姿は……

「ネコミミ!？」

頭の上でぴよこぴよこしてるネコミミ。

「しっぱ!??」

もふもふとしたミミと同じでまっしろなしっぱ。

「それに……髪の毛がピンクっ!??」

そして、人間の地毛ではありえないようなピンク色のショートヘア。

何度も目をこすっては鏡を覗き込む珠夏に周りのみんなは笑顔でうなづく。

「桃色の髪なんてリアル様だけじゃからのー」

「それに、ネコ族も我らの城にしかおりませんし」

「そんなに美しい毛並みのしっぱはリアル様だけだもの」

「あたしが、お姫さま?」

こんな姿を見せられては自分は人間だという自信が薄れていく珠夏は食い入るように鏡をのぞき続けるのだった。



？ ・お姫さま……ですか。（後書き）

お気に入り登録して下さった方、読んでくれた方、みなさん本当にありがとうございます。

更新、おそくなってごめんなさい。

これからも、よろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8777n/>

---

あの光をもう一度.....

2011年2月11日22時10分発行